

第 6 回アジアシンポジウム 参加概要 報告

Asian Regional Conference on Geohazard in Engineering Geology

日本応用地質学会 国際委員会

1. はじめに

アジア応用地質学シンポジウムは、アジア地域の応用地質学メンバーの活性、交流を目的に 1997 年の東京で初回を開催したものである。その後、2 年ごとを原則としてマレーシア、インドネシア、香港、ネパールで開催され、ネパールには当時の国情不安定から日本からの参加者はいなかったが、その他のシンポジウムには多数の参加者を数えてきている。このようなアジアシンポジウムに刺激されて、ヨーロッパ地区においても開催されている。

この会議への参加は、アジアにおける日本の応用地質学と将来の方向性を示すとともに、会員には英語による研究発表の練習の場として最適と思われる。例えばプレゼン資料に今回であればハングルや日本語が混じっていたりと比較的気楽にできる。

今回の隣国韓国におけるシンポジウムについては、2006 年 9 月に英国ノッチングムで開催された IAEG(International Association for Engineering Geology and the environment)会議において日本からの多数の参加を約束しており、井上会長や国際委員会の運動もあり、後記するように各大学の留学生も含めると 40 人に達する参加者と全口頭発表の約半数を占めることができた。特に東北支部からは支部長等の

努力の成果で 10 名がまとまって参加された。

IAEG アジア地区副会長に大島前副会長に続き中国 Wu 氏が就任して新たな活動をしており、このアジアシンポジウムも完全に IAEG の公式行事として認知されたといえる。次回は 2009 年 9 月 9 日から 11 日に中国 Chengdu(成都)で開催される予定である。

今回の韓国が開催した第 6 回アジアシンポジウムは、参加者が約 200 名と多く企業や大学からの多大な支援があったように見受けられ、会議、晚餐会、現場見学ともに極めて盛大かつ対応が丁寧であった。韓国応用地質学会としては初めての国際会議の開催で大成功であったと思われ、IAEG 会長の Fred Beinos 氏を含めヨーロッパからの参加者も十分に満足した様子であった。

次回 2009 年に中国で開催される第 7 回アジアシンポジウムを含め、アジア地域の応用地質学の活動に日本応用地質学会がどう取り組んでいくか、については国際委員会を中心にして検討していきたい。



2 日目の晚餐会で催された韓国伝統演奏

2. シンポジウム概要

主催：韓国応用地質学会(協賛 IAEG National Group)、組織委員会 15名

10月16-19日、16、17日は講演および研究発表会で、18日から一泊2日でField Trip
会議場所：Seoul 大学 Hoam Convention Center



シンポジウムの会場となったソウル大学
Hoam Convention Center

3. 16、17日の会議および発表会

会議参加者は197名(韓国98、日本43、中国37、その他アジア3、ヨーロッパ7、中東2、ほか)、日本からはコンサルタントと大学関係が主で、その他電力関係および国の機関等からの参加があった。

・挨拶

最初に Dr. KIM 元韓国応用地質学会長、Dr. BAYNES IAEG 会長、Prof. WU IAEG アジア地区副会長挨拶等があった。

・Key note

16日

- ①Dr. Yoon 韓国の応用地質
- ②USA Prof. West
- ③UK Dr. Martin Culshaw

17日

- ① 日本 Dr. 井上 日本の活断層
- ② UK Dr. Hawkins 泥岩地すべり
- ③ 日本 Dr.佐々 Landslide Forum
- ④ 元 IAEG 会長 Prof. Wang Sijing

・研究発表

研究発表は下表に示すように5つのセッションに別れて二つの会場で行われ、口頭発表が49(一人当たり15分間)、ポスタープレゼンテーションが30であった。このうち日本からの発表は口頭発表が22、ポスターが6であり多くを占めた。

研究発表内訳

テーマ分類	発表数	内日本(留学生を含む)
地すべり関係	16	9
土、岩盤物性関係	15	11
地震関係	3	1
地下水関係	5	1
土木地質関係	10	0
口頭発表計	49	22
ポスタープレゼン	30	6
全合計	79	28

シンポジウムのテーマが、Geohazard in Asia であったこともあり、Key note および研究発表ともに地すべりをテーマにしたものが多かった。活断層・地震災害については、井上会長の Key note 以外に、東北支部の活動として地域住民へのDIGの様子を橋本氏から紹介された。また、研究企画委員会と国際委員会の共著による、「Role and Future of Engineering Geology」が坂元氏から発表され、聴講者の共感が得られた。

今回の研究発表はアブストラクトで受付

られ、プロシーディングが印刷されている。正式な論文は提出者分だけを韓国学会誌の特集号に掲載するとのことであった。



研究企画委員会 坂元氏による研究発表風景



ポスターセッションの風景

4. Field Trip

2日間の Key note および研究発表に引き続き、Field Trip が行われた。見学は以下の2箇所のトンネル建設現場と洪水吐を増設中の既設のロックフィルダムであった。

①ソウル市内の地下鉄 Boondang 線建設のシールドトンネル現場

②Soyang River Dam

③Baehuryeong Tunnel Site

を見学した。各現場では非常に丁寧かつ

熱心な対応であり、学会側は通訳も同行していた。

最初に訪れたシールドトンネル現場は、Hangang 川を横断する地下 45mに掘削中のトンネルで、見学者は全員堅坑から地下に降りて見学した。トンネルは最小土被りが10数mであるが、地質は片麻岩であった。

次に訪れたダムは Chunchon city 近くに1973年に完成した多目的ダムで、高さが123mの中央コア型のロックフィルダムで貯水容量が29億 m^3 と東洋で最も大きい。左岸側に洪水吐があるが、最近起きた集中豪雨に対応しきれなかったため直径14mのトンネル式洪水吐2本を左岸尾根に建設中であった。詳しいことはわからなかったが、最近の気候変動の影響からか、台風の進路がかってと変化していることが原因だと推察された。また、右岸側に発電所があるが、その水圧鉄管に分厚いコンクリートが巻いてあり、その理由の問いかけに対して、「北朝鮮の万一の攻撃に備えてだ」との説明があり、南北の緊張を垣間見た思いであった。

その後、長さ5km余りと韓国で最も長い道路トンネル建設現場を見学した。トンネルは NATM と TBM で施工されており、地質はやはり片麻岩であった。ここでも見学のための完全装備が用意されており、切羽まで見る事ができた。



ソウル市内
地下鉄シールドトンネル建設現場の視察



現場で提供された完全装備でトンネル切羽に向かう見学者



Soyang River Dam
コンクリートで補強された水圧鉄管路

5. アジア地域 IAEG National group の meeting

ミーティングは17日朝午前8時から朝食を取りながら約1時間で行われた。アジア地区 Wu 副会長が進行役を務め、日本から3名(井上会長、登坂国際委員長、茶石国際委員)、中国2名、韓国2名、そのほかマレーシア、ネパールから参加があった。このミーティングには **Beynes IAEG 会長**、**Wan 元会長**、アメリカの **Dr. West 氏** が同席した。主な報告、議事は以下のとおりであった。

- ① アメリカのコロラドで6月に行われた IAEG カウンシルミーティング報告
- ② 2008年の各国の行動予定(2008年10月30-31日の日本の設立50周年事業が追加された)
- ③ 会費値上げ決定、37€(ブリテンなし12€)の報告があり議論がなされた。
- ④ 会誌がしばしば遅れる、IAEG本部の対応が十分でないなどの声があがり、**Beynes 会長**が改善するよう取り組む。
- ⑤ 次回2008年の IAEG カウンシルミーティングは、2008年9月14日にマドリードで行う予定(2008年9月15-20日に開催される EuroEnGeo、テーマが「The city and its subterranean environment」の会議に合わせる)
- ⑥ 2009年の IAEG カウンシルミーティングは、中国 Chengdu(成都)で9月9-11日に開催される第7回アジアシンポジュームの前日の9月8日に開催する予定。

国際委員会 茶石 貴夫